

カラマツ苗木の現状について

林務部 森林づくり推進課 主査 狩戸知喜

1 はじめに

カラマツは、長野県周辺に広く自生する落葉針葉樹で、明治期以降に盛んに造林され、第二次世界大戦前には、朝鮮や満州にも出荷されるなど、長野県の林業を支える重要な基盤の一つだった。その後も、戦後の復興を目的に大規模な造林が進められ、大量の種苗が必要となり、苗木生産も盛んに行われた。しかし、昭和40年代後半になると国内での造林が一段落したことで、その後は造林面積が減少傾向を続けている。一方、戦後に植栽されたカラマツは、当初の伐期として予定していた齢級を越え、そろそろ更新を考える時代となってきている。そこで、これまで育ててきたカラマツの有効利用を図るとともに、更新後の持続的な森林づくりをすすめていくために必要になる苗木生産の実態を理解する必要がある。

2 長野県産苗木の動向

長野県内では7地域で苗木の生産が行われており、特にカラマツの苗木は、松本地域、佐久地域を中心に5地域で生産されている。しかし、苗木使用量は、年々減少しており平成10年度以降をみると、ヒノキの減少量は急激となっているが、カラマツの使用量は元々少なかったこともあり、僅かな減少となっている中で、平成20年度以降少しずつ増加傾向にある(図1)。しかしながら、苗木生産は、種子を採取してから出荷するまでに3年をかけて育てているため(図2)、数年先の使用量を見通しながらの生産となり、使用量の見極めをいかに現実に近い数量として把握できるかが重要となる。

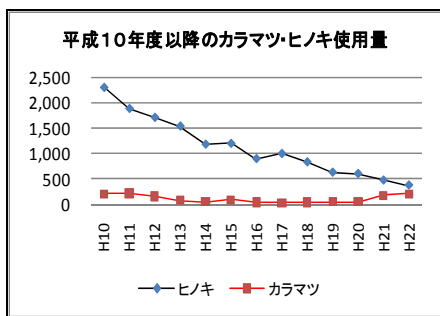


図1 長野県のカラマツ・ヒノキ苗木使用量

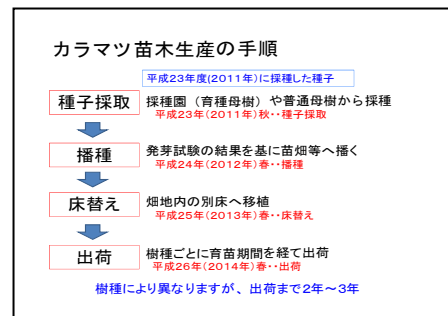


図2 カラマツ苗木の生産手順

3 苗木生産に係る規定

苗木生産に用いられる種苗が、それぞれの地域で健全に育成されるためには、優良な母樹から種子を採種し、地域の環境に適合した苗木を用いることが必要である。このため、カラマツを始めスギ、ヒノキ、アカマツなど造林実績が大きな主要針葉樹8種については、林業種苗法により種子源や種苗の移動範囲が制限されている。こうした法律を熟知した生産者が種苗生産者として登録されており、原産地から出荷までが健全に行うことができる

実行体制が確立されている。

4 長野県内の採種園

4.1 採種園の役割

苗木生産に用いられる優良な種子を確保するため、良好な成長が保障できる精英樹（母樹）を集めた採種園を造成している。長野県内の採種園はスギ、ヒノキ、カラマツ、アカマツの4種で合計7箇所整備されており、採種園で採種された種子を用いて、造林用の種苗が生産されている。

採種園で採取した種子から生産された苗木は、良質な成長や品質に優れた苗木として認められ、県内各地で森林づくりのための優良苗木として使用している。

4.2 優良な苗木の確認

優良な苗木として出荷される時には、必ず生産者表示票(図3)を添付することになっている。この生産者表示票には、苗木の樹種名、種子が採種のされた場所、生産事業者名また名称及び住所が明確に記入されており、長野県内で生産された優良な苗木であることが確認できる。

生産者表示票を確認

生産事業者表示票		
樹種	カラマツ	苗木の数量 2 500
種苗の採取の場所	上伊那郡 箕輪町・中箕輪採種園	
生産事業者名	長野育 48-3	
苗木の育成の場所	松本市 〇〇〇	

提供：長野県山林種苗協同組合

図3 苗木に添付する生産者表示票

5 今後のカラマツ苗木生産に向けて

本県における苗木生産は、採種園などの優良な母樹から採種した種子により生産されており、良質な成長や品質に優れた優良な苗木を使用し森林づくりが進められている。しかし、苗木生産は、2年～3年の期間が係るため、数年先に必要となる苗木使用量を把握するためにも、先を見越した計画的な更新をお願いしたい。

一方、県ではカラマツの欠点とされるねじれが少ない品種を選抜し、箕輪町の中箕輪採種園に導入したことから、近い将来には更なる優良苗木の種子生産が可能になると期待できる。

6 残された課題

近年は、造林面積の減少とともに苗木生産量が減少したため、苗木生産者の中には後継者不足や高齢化など多くの課題がある。現在は、持続的な森林づくりのために林業用苗木を作り続けている苗木生産者に支えられ、苗木生産が継続されているが、将来にわたって技術が伝承されているように苗木関係者全体で対策の検討が必要である。

そこで、これから次世代の造林を行うときは、長野県内の採種園で育った、品種系統が優れた優良なカラマツ苗木を生産している県内の生産者が育成した優良な種苗により、よりよい長野県のカラマツ林が造成されることを期待する。